

# 水鞠



mizumarien

四方を海に囲まれ、水資源に恵まれた日本。  
人々は昔から、水を暮らしの中に取り込み、慣れ親しむことで水との接し方を築いてきた。  
しかし現代の都市生活では、水は「役立つ」「役立つしない」のどちらかで判断され、  
私たちの生活に「役立つしない」と判断された水は私たちの視界の外へと追いやられている。  
もしかすると私たちは、都市や建築の居住環境の質向上という目的のために、水を「都合の良い存在」と認識し、水の重要性を理解しながらも、水に対して冷ややかな態度を取っているのかもしれない。  
そもそも、水は本来「役立つ」「役立つしない」の二分法で割り切れるものではない。

近年、線状降水帯やゲリラ豪雨、土砂災害など、水による災害が多発し、水と大地の関係も変化してきている。だからこそ、今までとは異なるケースで水の存在を捉え直す必要があるのではないか。

このような考えを軸に、水の視点から、「建築」と「都市」の可能性を探ってみることにした。

# 水について

## 水と人のからだ

人の体は水で満ちている。水は生命の源であり、健康の源でもある。水が不足することで生まれる体の歪みや病気があるが、近年では水の中で体を動かすなど水を用いた治療やリハビリテーションが確かな医学的知識として広がってきた。



## 海と日本人

日本は国土面積の約12倍の海域を有し古くから海の恩恵を受けてきた。しかし日常生活において海に触れる機会は少なく、特に若い世代を中心に国民の海離れが進んでいる。海洋意識の形成には幼い頃の海体験が大きく影響していることが明らかとなっている。



## 水と日本の大地

近年日本では、台風に伴う暴風雨や線状降水帯と呼ばれるメソ降水系に伴う集中豪雨による激甚災害が多発しており、水と大地の関係が激変し大きな被害を生んでいる。今後も降水量や洪水発生頻度が全国で増加することが予想されている。



## 水と都市の歴史

古くから人々の生活は川を中心として始められ、各々の時代背景において地域に応じた産業・文化を形成してきたが、高度経済成長期以降、水質の悪化など都市部の川を取り巻く環境は著しく悪化し、人々は川に背を向けるようになった。



## 水辺が人に与える癒し

今後の水辺整備は先細りする可能性が高く「水辺」の新たな価値を創造する必要がある中で、水辺の新たな価値として「ストレス軽減効果(癒し効果)」が目ざされており、水辺の癒し効果を実際の医療や福祉の現場にも取り入れた事例もある。



## 都市で注目されている子育て問題

【どの地域にも子育てに関する問題は存在するが、都市が特に深刻で改善が急務だと感じた】

テレビゲームやSNSを用いた室内遊びの増加



騒音問題



近隣住民との関係の希薄化



ひとり親家庭の増加・孤立化



集団遊び・異年齢集団の減少



核家族の増加



女性の社会進出活発化による子育てと仕事の両立の難しさ



東京などの都市での逆ドーナツ化現象による保育園をはじめとした子育て支援施設の不足

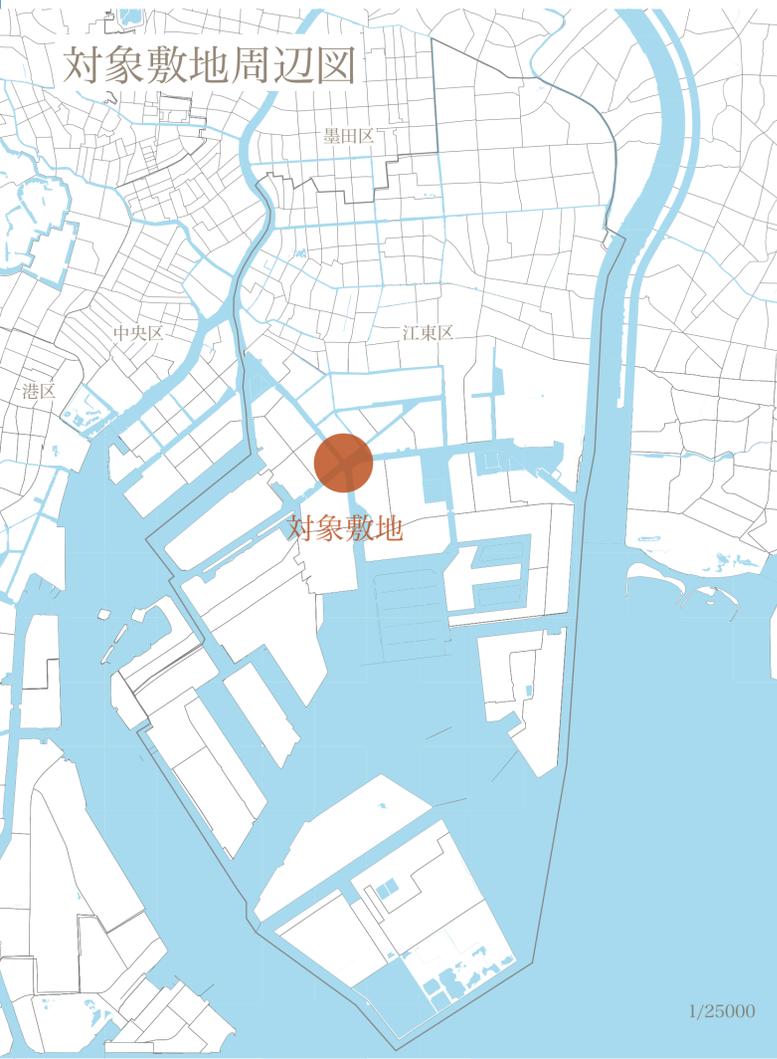


### 育児ストレス→児童虐待

親の強い育児ストレスは虐待のリスクとなると言われており令和3年度の児童虐待相談対応件数は過去最多を更新

## 『水×都市×子育て×建築』の提案

## 対象敷地周辺図



## 対象敷地：水彩都市【江東】

### 東京都江東区の特徴

江東区は水辺と緑が豊かで、伝統と歴史を重んじ、昔ながらの下町の風情が色濃く残る人情に厚く温かいまちといわれている。歴史的に常に水と関わりを持って発展を遂げてきた地域であり、区の東西に荒川と隅田川を配し、南は東京湾に面している。さらに総延長50km以上の河川・運河が区を縦横に走り、また親水公園などが整備されており緑も多く、都心にありながら豊かな水と緑に囲まれた癒しの空間が広がる『水彩都市』である。

江東区の魅力のひとつとして、都心まで近い点が挙げられる。江東区内を走る電車は、総武線、京葉線、東西線、有楽町線、半蔵門線、都営新宿線、大江戸線、ゆりかもめ、りんかい線、亀戸線の10路線。電車だけでなく、区内や近距離の移動であればバスも便利で、都営だけでも6つの営業所がバスを運行しており、区内のバス路線図を見ても、ほとんどの地域をカバーしていることがわかる。首都高速や環状三号線などの主要幹線道路が通っているため、自家用車やレンタカーで遠方へのアクセスもしやすくなっている。以上のように、通勤や通学、休日に遊びに行く際など、どこに行くにも便利ところが、人気なポイントのひとつといえる。

また、江東区は、23区内とは思えないほど緑の多いエリアであり、実際に、区内にあるすべての公園の面積を合計すると約517万㎡。江戸川区に次いで、23区内で2位の広さを誇る。公園の総面積を人口で割った一人当たりの公園面積も9.91㎡と、23区内で第3位の広さとなっており、都心に近いエリアにもかかわらず、緑の中で暮らせる環境が整っているといえる。

江東区内にある都立公園は、猿江恩賜公園、亀戸中央公園、大島小松川公園、清澄庭園、木場公園、夢の島公園、東京臨海広域防災公園の7つで、その数は23区内で第1位であり、いずれも広大な敷地を誇り、非常に開放的な空間となっている。

また、休日などに子連れでも出かけやすい大型商業施設が多くある点も魅力的である。代表的な施設でいうと、湾岸地区のアーバンドックらぽーと豊洲、ダイバーシティ東京プラザ、有明ガーデンなど。大人が楽しめるショッピングモール、テーマパークはもちろん、「キッズニア東京」、「リトルプラネット」など、子どもが楽しみながら学べる施設も充実している。

また、江東区は歴史・文化の観点から、深川八幡祭りや深川めしなど江戸の文化が息づく深海エリア、亀戸神社や砂町商店街など見所満載の城東エリア、開発が進み未来的な雰囲気が漂う臨海部エリア(湾岸エリア)の大きく3つのエリアに分けることができる。その中でも今回の研究では、江東区の特徴である水路を活用したいと考えたこと、また新たな建築を建てても大きく景観が崩れないこと、そして近未来的な街並みの中に木造建築や自然を取り込みたいと考えたことにより、臨海部エリアの一部を対象敷地とする。

### 東京都江東区の子育ての現状

近年日本では少子化が大きな問題として取り上げられている一方で、江東区では年少人口の増加が続いている。2021年4月時点の人口は約52万人。20年前と比べて約15万人も増加しており、その増加数は23区内で1位となっている。特に臨海部の人口増加に対応するため、住宅の規制と教育インフラの整備が急ピッチで進んでおり、今後の年少人口(0~14歳)の増加に備え、人口増の抑制策と教育インフラの整備が急務となっている。2029年、江東区の年少人口は現在から1割ほど増えた約7万3千人になると推定されている。

中でも注目すべきは、子どもを抱える30~40代のファミリー世帯の人口が大きく上昇している点である。2019年度に行われた第24回江東区政世論調査によると、江東区に住む30代のうち、居住年数が10年未満の人の割合は65%を超えており、他の世代よりも居住年数が短い人の割合が高くなっている。このことから、特にファミリー世帯の人たちが、この数十年のうちに江東区に移住してきていることが読み取れる。マンションの増加に伴って人口増に転じていて、教育や子育て支援に関する施設の需要が高まることは必至である。

魅力的な特徴が詰まった地域であるが、未だに、江東区の大きな魅力でもある「水路」を十分に生かききれずにいる。2022年にマスタープランの中でも水との関わり方の改善が目標であることが示されており、今後の江東区の更なる発展の鍵となることが予想されている。

以上を踏まえ、子育て施設の需要があり、且つ水路が張り巡らされた珍しい地形であること、また、それを生かききれないことを踏まえ、今回の対象地を江東区臨海部エリアに設定する。

